

# 芝野先生との思い出

日本社会事業大学 木 村 容 子

芝野松次郎先生の門下生のうち存命する最も古株ということで、先生のご退職記念号に寄稿をさせていただくようになったかと存じます。光栄に感じるとともに恐縮するような気持ちもありますが、拙いながら一筆取らせていただきます。

## 芝野先生－武田先生－私のご縁

芝野先生との出会いを語るうえで、武田建先生の存在は欠かせない。芝野先生は、学生時代臨床心理学に関心をもち、1970年代はじめ、語学専攻から転身なされて武田先生のもとで学ばれた。当時、武田先生は関学社会学部社会福祉専攻でケースワークとグループワークを、大学院では行動療法を教えておられた。武田先生の研究と臨床の関心に大いに影響を受けられ、芝野先生の運命を大きく変えたという。そして、行動変容アプローチをソーシャルワークの中に位置づけ、芝野先生の M-D&D の基盤となった Thomas 先生がいる、ミシガン大学ソーシャルワーク大学院に進学なされた。その1970年代末、フルプライム招聘客員研究員として当大学院に来られた武田先生と、ともに机を並べて勉強なされたようだ。

さて、私はというと、子どもの頃に大阪の堺 YMCA に所属し、当 YMCA のいろんなプログラムを通じ伸び伸びと育ち、大学生になってからはボランティアリーダーをしていた。リーダートレーニングも然り、大学の授業科目でもグループワークや行動療法に関し学び、素人ながらにその教えを子どもたちとの関わりに活かそうとしながら活動していた。それゆえ、3年次には武田先生のゼミに入りたかったが、その年度武田先生はサバティカルを取られ、ゼミは開講されなかった。ゼミ選びにもたもたしていた私に、友人が「子ども領域でああなたの関心に近いことを実践、ご研究なされている芝野先生がいる」とおしえてくれた。もともと社会福祉を副専攻にしていた私は、恥ずかしながら芝野先生を存じ上げていなかった。芝野先生とのゼミ面談で初めて先生とお会いし、YMCA での活動やそれを通じての学びと関心を必死にならなってアピールし、ゼミに入れていただいた。

芝野先生が武田先生のお弟子さんでもあるということは、私が関学の大学院に進学したいと芝野先生に相談した頃を知る事となる。学業には到底熱心とはいえなかった私に対し、芝野先生は開口一番「無理です」とおっしゃった。いろいろ考えて「入試に落ちたらその時にまた考えます」と再度相談に行った際に、芝野先生は当時修士課程の指導教官ではなかったもので、武田先生を紹介するとおっしゃり、つないでくださった。

初めて対面でお会いした武田先生は、私の YMCA を通じた育ちであるとか大学院での勉強における関心に、若い頃の自分を見るようだと共感してくださり、とにかく入試を突破してくれたら引き受けてとおっしゃってくださった。芝野先生の懸念をよそに、武田先生があっさりと O.K. をくださったことに、「え？」ととても意外そうな声を出されたのを覚えている。当時理事長職をされていた武田先生は、芝野先生に指導していただくことを言い添えた。

このように、武田先生という師を介し、武田先生、芝野先生との弟子関係がスタートすることとなった。芝野先生にとっては、推したいわけでもない学生を受け入れ、以後数十年に渡り指導するハメとなったが、私にとってはなんとも幸運なことであった。

## 温和でポジティブに評価する先生

芝野先生に20年以上おつき合いいただいている私も、周りの誰もが言うことであるが、芝野先生はいつもいつも温和で穏やかである。お仕事上では嫌な事や不快な事もおありかと察するが、機嫌が悪いとい

ったお姿を見たことがない。なんだかほんわりとしている先生の雰囲気は、みんなを安心させる。

芝野先生から初めて誉めていただいた日のことを今でも覚えている。大学院に入学して間もない頃だ。「木村さん、よくがんばっていますね」とおっしゃる芝野先生に、「何がですか?」と尋ねた。大学院生活が始まったばかりで、各授業に参加しているに過ぎない、まだ自分の研究も始まっていない頃のこと、何を誉められているのか私には思い当たることがない。すると、「毎日大学に来ていますね」と。学部時代の私からすれば確かにそうなのかもしれないが、さすがの私も苦笑してしまった。これは芝野先生の私に対する行動療法的関わりなのか?と思った。芝野先生はゼミ生一人ひとりをよく見てくださっていて(ゼミ生間では“アセスメント”と呼んでいる)、できている所、良い所、独創性のある所に目を向けて評価して下さる。良い意味でも悪い意味でも(?)一人ひとりに合わせて指南して下さり、いつも味方で居てくださるのが芝野先生なのである。

私は、ただ一人(?)ただ一度(?),芝野先生を怒らせたことがある。博士論文が書けない、書かないと芝野先生に言った時のことである。すると、「それは契約違反です!」と厳しい口調でおっしゃられ、びっくりして私は号泣してしまった。博士課程に入ったということは博士論文を書くということであると。M-D&Dモデルに従って専門里親支援の実践モデル開発をテーマに研究を進めていたけれども、課程博士の期限内に叩き台モデルのモジュールすべてをつくり、試行・評価する時間も気力ももうない。だから博士号を取得するレベルの論文にならないと、私は芝野先生に言った。きっと、私が自分で研究費を取ってその研究を継続させ、試行・評価と進め、博士論文を仕上げることを待っていらっしやっただと思う。芝野先生にとっては残念な決断だったであろうが、博士論文としての収め所を助言して下さった。この時のことがなかったら、私は博士論文を出せていなかったと思う。

私のこの一件に関しても、芝野先生は寛大な心で指導くださり、博士論文の口頭試問では、副査の先生方とのやり取りの後最後に、審査の場かつ主査の立場には似つかわしくないくらいの表現で、論文の良い所と努力を賞賛して下さった。あまりの意表で、私は涙が出そうになった。しかしながら、そのありがたい芝野先生のお言葉は私の頭に残っていない。何故なら、ものすごく動揺し、泣くのを堪えるのに精一杯だったから。出来の悪い教え子で申し訳ないこと極まりない。本当覚えていないことがもったいなかったと、今でも思うし、一生私は悔い続けるであろう。

### お忙しい芝野先生とのアポと指示

とにかく芝野先生のもとには、実に多くの仕事の依頼がある。寛大かつ好奇心にも満ちている芝野先生は依頼をそう断らない。院生に関しても、全国から指導を仰ぎたいと人が集まって来て、多い時にはゼミ生が20人を超えていたかと思う。芝野先生のスケジュールはいつもほぼほぼ詰まっている。

私の修士時代、大学院ゼミをお持ちでなかった芝野先生とは直接かご自宅への電話でアポを取ってお会いしていた。まだインターネットも携帯電話も普及していなかった時代である。ぎゅうぎゅう詰めの芝野先生のスケジュールでは、一つの時間が押すと心太式に次が遅れる。なので、アポの日時に芝野先生の研究室に行くと、私宛のメモが扉に貼られているのが常であった。そのメモは“I'll be right back”。「なんで英語?rightってどのくらい?いつ出て行ったの?」研究室を離れるわけにも行かず、廊下にある傘立てに腰を下ろしてじっと待つ。忘れられているのでは?と不安にもなるが、最大1時間くらいまでには研究室に戻って来られた。2000年に博士課程に戻った時、ゼミ生との個別アポが重なってあった日に、「じゃ、私の番が来たら携帯鳴らしてください」とゼミ生が芝野先生に言っているのを見てとても驚いた。指導教官に電話をしてくれと依頼するのは気が引ける。けれど、私もその合理的システムにすぐに乗っかってしまうようになったのは言うまでもない。

もう一つ、情報技術(IT)の進歩で助かったのは、携帯情報端末(PDA)の登場である。私の修士時代は手書きの手帳しかなかったので、芝野先生は時にアポをバッティングさせてしまったり、時にお見落としになることがあった。IT機器が大好きでお強い先生は、PDAをいち早くお使いになられ始め、スケジ

ユーザ管理が格段にお上手になり、私たちも芝野先生にお会いしやすくなった。ただし、アポを取ろうとした時にこれを持っていらっしやらない時があり、これはどうにも防ぎようがなかったのだけれども。

他に芝野先生とお会いするために工夫したのは、場所を選ばないということであった。大学キャンパスでお会いすることを期待してはいつになるかわからない。先生の外部でのお仕事の前後わずかな時間を目掛けてその仕事先に参上する、愛車を運転して仕事と仕事を移動するところに同乗させていただく等々、所かまわずお邪魔させていただいた。その時間中、「今日の仕事は何だったんですか」「うまく行きましたか」のおしゃべりから始めるのだが、お車が好きな芝野先生が愛車のことをお話し始めたら、自分の用件にはそう行き着かなくなる。けれども、結構この時間は楽しいものだった。きょうだいのいる子どもが、自分一人を連れて外出してくれる親との時間を満喫するのと似ているような気がする。

IT が進歩しても、ゼミ生がどうにもできなかったのは e メールである。先生には毎日おびただしい数のメールがあるだろうことは容易に察するが、とにかくゼミ生への返信がなかなか来ない。とくに研究に絡む期限のあるもの、早急に対応しなければならないものごとに関し、こうこうしようかと考えますが、調査票をつくってみました等々、いつまでに返信がほしいとメールしても返事が来ないのである。見てくださっていないのかもという不安が起こり、時間が切迫してくるので焦りは大きくなる。これについて、いろいろなゼミ生が芝野先生との研究を重ねていくにつれ認識したことは、「返事がない=Go」ということであった。そもそもゼミ生の主体性を尊重する先生。よほど不具合がある場合はレスするようであるが、大方 O.K. で、何かあってもフォローしてくださるのである。この認識というか判断というかにゼミ生が行き着くまで、かなりの時間を要したのが残念である。

## M-D&D の理論に翻弄され

みなさんもお存知のように、芝野先生は、子ども家庭福祉領域における実践モデル開発と、実践モデル開発のための実践モデルの理論構築と方法・手続きの体系化に多くの功績をあげられた。1990年代に開発した神戸市総合児童センターにおける「親と子のふれあい講座」は、神戸市内の全児童館に普及させ、現在も続いている。子ども虐待ケースマネジメントマニュアルは、後に子ども虐待対応ナビゲーションシステムへと発展した。児童養護施設や乳児院におけるファミリーソーシャルワークの実践モデル、子育て支援総合コーディネートの実践モデルの開発等々がある。

1990年代は、Thomas の DR&U (Developmental Research & Its Utilization) に基づき、「親と子のふれあい講座」等を開発なさっていた。私が芝野先生とともに取り組ませていただき、修士論文とした西宮市健康開発センターのスモキングコントロール・プログラムの開発もそうで、この頃は行動療法にもとづく一介入方法・手続きの開発が主であったかと思う。しかしながら、それまでの開発的研究手法の煩雑さを緩和するとともに、ソーシャルワーク領域における価値と実践理論をもとに新たな実践理論を発展させて、2000年代初期 M-D&D (Modified Design & Development) を提唱なさった。2002年の『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』(有斐閣)には、その理論基盤が詳説されている。プロセティック・アプローチや、PEIM (Person-Environment-Interface-Management) 理論へつながる Goldiamond のオペラント行動理論とダイアグラム等が紹介され、私には難解であった。

そこで、私は芝野先生がそれまで執筆なさった論文等を片っ端から集めなおし、芝野先生のそれまでの開発研究の変遷を追い、それらの理論がどう発展し構築されていったのかを整理することにした。私の博士論文の一つの節としてある。余談になるが、芝野先生は、私の博士論文の引用参考文献にご自身のものがずらっと並び、1節を割いてまとめられているこの箇所をご覧になって、「気持ち悪い」と言い続けておられた。ツレナイなあと思ったものである。

## 先見の明

芝野先生から教えをいただいている中で、芝野先生のお考えや発想でとくに印象に残っていることがい

くつかある。

芝野先生は、1990年代半ば、ケースマネジメントについて、時間の流れの中で変化する人の問題とその対応をその連続性でとらえる必要性を論文でも説いておられ、「かかりつけのお医者さんのように、子どもとその家庭の支援の領域でも、子どもの成長過程の中で困ったことがあったらその時々ケースマネージャーのところに行って、支援を求めて困難を解決しては成長していくというようにならねばならない」とおっしゃっていた。当時は子育て支援というものの自体の認識がそれ程なかった時代である。高齢者分野では在宅介護支援センターや地域包括支援センターが展開されていったのに対し、子ども家庭福祉分野では近年ようやく「結婚、妊娠・出産、子育ての各段階に応じた切れ目のない取組」が施策に掲げられ、さらに市区町村における地域のリソースや必要なサービスと有機的につなぎ、継続的なソーシャルワーク業務を担う拠点（市区町村子ども家庭総合支援拠点）の設置がはじめられようとしている。

2000年前後には、芝野先生は Total Quality Management (TQM) の手法に関心をもっておられた。「PDCA サイクルやその手法は M-D&D と似たものであり、参考になる」とおっしゃっていた。M-D&D に TQM を採り入れ論じている論文が一本ある。しかしながら、その後プツンと先生は TQM について触れなくなった。何かお尋ねしたことがあるのだが、「TQM は手法としては参考になるけれども、社会福祉の理論ではないし“福祉の心”に根づいたものではない。社会福祉の理論としては馴染まない」と答えられた。社会福祉独自の理論としての構築を目指されていた。

最も感銘を受け、仰天したのは、子ども虐待対応ナビゲーションシステムの開発において、人工知能 (AI) のエキスパートシステムを採り入れた構想だ。熟練した児童福祉司の経験や勘を含んだ意思決定プロセスを分析して法則を見出しプログラミングし、またそのデータを蓄積していくことでどんどんシステムを発展させていくというものである。ロボットやゲームの開発では聞いたことはあるが、ソーシャルワーカーが使うシステムにそのようなものを採り入れるなど、私には考えもつかない。2000年頃の IT では技術的にもコスト的にもかなりの困難があったし、ましてや理系でもなく大きな研究チームを組んでいるわけでもない。これまた、最近国レベルで子ども家庭福祉分野の成果指標をつくりデータベース化するとか、そこに AI を組み込むであるとかいう調査研究が始められていると聞く。

長年芝野先生を知る関係者の方と、グチにも似た開発研究の難しさのお話をした際のことである。その方は、「芝野先生はいつも 10~20 年先を行っているから」とおっしゃった。10~20 年?! と当時は思っただけでも、今になってそれが本当であることがよくよくわかった。

自分自身が一教育者・研究者になった今、痛感していることであるが、一流の研究者にあるのは、発想力と創造力と飽くなき探究心。それと、それらを支える分野を超えた広い知識の豊富さであろう。院生時代は、単に自分は頭が悪いからだ漠然と思っていたが、研究のお作法や方法がある程度身につけているかと思う現在、それをまざまざと感じることが多くなった。努力で発想力や創造力、飽くなき探究心といったものは身につくものではないように思うが、勉強をもっとして引き出しを増やさねばと思う。

### Compassion と度量の大きさ

“compassion” や “福祉の心” は、芝野先生がお好きな言葉であり、先生の論文や著書の中でもよく述べていらっしゃる。ソーシャルワークの理論や実践モデル開発、そこにまつわるクライアントのウェルビーイングに対する専門的価値というだけでなく、人として誰にでも向けられる芝野先生のお気持ちや態度そのものにあるものである。一人ひとりを大切にからこそ、人にとやかく言わない。芝野ゼミ生にすれば、自分の研究に対する答えのようなものを求めたり、先生からいろいろと指導や指示をいただきたいと思ってしまうこともある。けれども、次の人生には一人の人として学者として巣立っていかねばならない院生を育てるにあたり、自由に自分で考えて進めるように導いてくださっているのだと思う。また、巣立っていった門下生の動向を気かけ、最近では学内外の業務や活動が増えた私の相談事に応じてくださり励ましてくださる。私の周囲にいる方々にも、「木村さんはどうですか?」「(木村を) よろしくお願

します」と頭を下げてくださっている。

また、芝野先生は独創性を重視する方である。たとえば論拠には乏しい面があったとしても、面白い！と支持してくださる。それでも理論についても調査内容や方法についてもこれでいいのかといろいろ悩む私の背中を、「もう文献を調べるのはやめにして、先に進んでください」と押しつけてくださることも多かった。先生ご自身が開発した実践モデルや先生独自の理論であっても、「時代が流れる中で変化していくものです」と言い、たとえ発展途上の院生、研究者であろうと、その考えや新たな発想を受け入れ、楽しんでくださる。

そのような芝野先生の姿はゼミ生に受け継がれている面が多々あると感じる。私自身は、まだまだ人としても、教育者、研究者としても、器が小さいと自己嫌悪に陥ったりするのだが、芝野ゼミ生の中では互いに学び合いサポートし合う土壌があったし、多くが卒業してもゆるやかにつながり、共同研究をしたり、何かの時に連絡を取り合ったり、動向を気にかけていたりしている。

「早く卒業してください」と長年芝野先生に言われていた私であるが、ゼミから巣立ってからというもの、先生にメールすると、すぐにご返信くださる。今も気かけ支えてくださる芝野先生にいつも感謝している。現役を引退しても私たちの師としていつまでも見守り、ご教示いただきたいと願う。芝野先生には、現役引退したら、やりたい事がいろいろあるとうかがっている。芝野先生の発想力、創造力、飽くなき探究心は次はどこに向けられるのであろう。先生のご多幸を祈りつつ、どのようなステージに入られるのか楽しみにしている。